

国旗「日の丸」のルーツは「種子島家の船幟」

1. 国旗制度の経緯

安政元年（1854）幕府（13代将軍 家定）は、日米和親条約調印後、外国船と区別するための標識が必要となり、日本国共通の船舶幟（日本惣船印）を制定する必要が生じた。その際、薩摩藩主 島津斉彬が、「日の丸」の採用を強く進言し、これが採用されたと言われている。

明治3年（1870）1月27日の太政官の布告により、「日の丸」が国旗として制定された。

2. 古記録に見える「日の丸」

「日の丸」は、「日のはた（日の旗）」・「日章旗」・「日の御旗」・「日の丸の旗」ともいわれている。

現存最古の「日の丸」としては、山梨県甲州市（旧塩山市）の裂石山雲峰寺所蔵のものが知られている。これは後冷泉天皇より源義光へ下賜されたという伝承があり、「御旗」（みはた）と呼ばれて、甲斐源氏宗家の甲斐武田家の家宝とされている。また同じく中世の「日の丸」とされるものとしては、奈良県五條市（旧西吉野村）の堀家に伝わる後醍醐天皇下賜のものが知られる。

日本で白地赤丸が「日の丸」として用いられるようになった経緯は諸説あり、正確には不明である。

一説には、以下のとおり、源平合戦の結果が影響しているとも言われている。

平安時代まで、朝廷の象徴である錦の御旗は赤地に金の日輪、銀の月輪が描いてあり、平安時代末期には、平氏は自ら官軍を名乗り御旗の色である赤旗を使用し、それに対抗する源氏は白旗を掲げた。平氏は御旗にちなんで「赤地金丸」を、源氏は「白地赤丸」を使用した。平氏が滅亡し、源氏によって武家政権ができ、源氏の後に出てきた武将たちは、織田信長も徳川家康もみな自分たちは源氏の流れを汲んでいるという意識を持った。そして彼らは戦いのときには必ず日の丸の旗を掲げたのだ。

長篠の合戦のときである。長篠の合戦は1575年5月21日早朝から始まった。織田信長と徳川家康の連合軍が武田勝頼と戦い、武田方の騎馬隊は信長側の設けた柵に阻まれ、かつ柵のなかから撃ち出された大量の鉄砲によって敗れ去った。

「この時、信長も家康も家紋をあしらった自分の旗を持っているが、連合軍として戦うときは日の丸を掲げていた。対する武田側もまた、日の丸を掲げていた。つまり日本を支配するのは自分たちだと思ったときには、日本の国印、日本全体の国の印として、日の丸のイメージが武将の頭のなかに入っていた」

以後、代々の将軍は源氏の末裔を名乗り、「白地赤丸」の「日の丸」が天下統一を成し遂げた者の象徴として受け継がれていったと言われる。



長篠合戦図屏風（日の丸の幟が両軍に掲げられている）

また、室町時代の勘合貿易や、寛永12年（1635）までの間に行われた朱印船貿易の際に日本の船籍を表すものとして船の船尾に「日の丸」が掲げられている。戦国時代には日の丸の旗幟等がさかんに用いられており、毛利氏・上杉氏・伊達氏などが軍旗として、日の丸を用いている。



伊達家の旗のひとつ「日の丸大龍」



毛利元就扇表



上杉謙信馬標

江戸時代、特に「日の丸」を重用したのは幕府である。

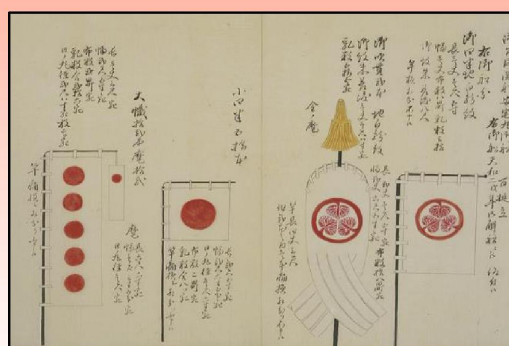


安宅丸



天地丸

将軍の御座船安宅丸（あたけまる）と天地丸（てんちまる）は多数の日の丸の幟（のぼり）で装飾されていたし、1673年（延宝元）に年貢米廻漕のために雇った廻船に立てることを義務づけて以来、日の丸の幟（日の丸船印・朱の丸船印と呼ぶ）が幕府船の標識として常用された。



江戸幕府将軍御召船 船幟（日の丸）

また朱の丸の帆印は1799年（寛政11）から始まる幕府の第1次蝦夷地直轄時の赤船（あかふね）で使われている。徳川幕府は「日の丸」を公用旗として使用し、家康ゆかりの熱海の湯を江戸城まで運ばせる際に「日の丸」を立てて運ぶなどした。

また、江戸期には、「白地に赤丸」は意匠のひとつとして普及していた。江戸時代の絵巻物などにはしばしば白地に赤丸の扇が見られるようになっており、江戸時代の後半には縁起物の定番として認識されるに到っていた。

文献では、室町時代の歴史書である、「応仁記一 御霊合戦之事」に「朝倉孝景、日の丸をさし、荒手と成りて人替わる・・・」とある。

同じく室町時代の、「長録寛正記」には「此右衛門佐殿は上意をそむき給ひ、天下に責められ、己に討手として日の御旗を向けらるる・・・」とある。

更に「見聞雑録」には、「府中六所の森に虎輝は紺地に日の丸の旗を見て・・・」などと見える。

また、船幟としては、薩摩藩に服属していた琉球王国が中国への進貢船に「日の丸」を用いていた。いつから日の丸を掲げるようになったのかは定かではないが、19世紀初頭の進貢船屏風絵には、はっきりと「日の丸」が描かれている。また沖縄の祭り爬竜（ハーリー）で用いられる爬竜船の船尾部にも「日の丸」の幟（のぼり）が掲げられている。



19世紀 琉球 はりゅう船の船幟

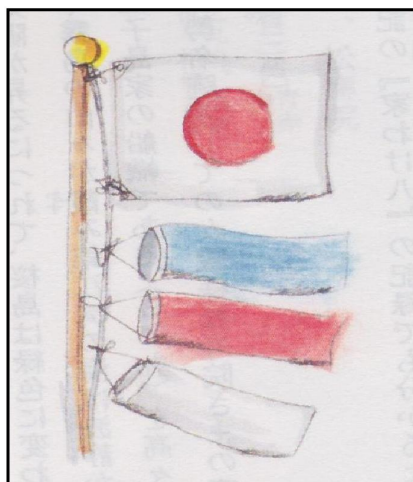


19世紀初頭の琉球王国の船幟（左）薩摩藩の船幟（右）

これらの記録等から、明治3年に国旗として制定される以前にも「日の丸」が用いられていたことも事実である。

3. 種子島家文書に見える「日の丸」

種子島家には鹿児島県文化財に指定されている古記録文書「種子島家譜」が保存されている。その中に次のように書かれている。



種子島家の船幟<イメージ>
松寿院の一生より

天保6年（1836）12月3日

前の太守公及び世子少将公、磯山に狩す。松寿院殿、命を奉じ、船よりこれを観る。

船中に日の丸、下着3着（青赤白）吹貫船幟を立て（公、松寿院に語げて曰く。種子島家の船幟は日の丸なり、故に新たにこれを製せよと。御城代市田美作義宣、家老に命ず。世々相伝えて当家の船旗と為す）

松寿院とは、種子島家23代島主久道の名跡隣子で天保6年時には、39歳であった。

前太守公とは、松寿院の実父薩摩藩主島津齐宣公で世子少将公とは、松寿院の実兄藩主齐興公の嫡子名齐彬公のことである。ちなみに齐彬公の家督相続は、43歳の時であり、嘉永4年（1851）2月である。

4. やはり「日の丸」は種子島の船旗だった・・・

天保6年（1836）

鹿児島、磯山での鹿狩りの際、島津斉宣公が「種子島家の船幟は日の丸なり」と言ったことが、種子島家譜に記されている。斉彬公も同じ場所におり、この時27歳であった。

安政元年（1854）

斉彬公、水戸藩とともに、日本の船幟として「日の丸」を幕府に進言。

「日の丸」が日本の船幟となる。

安政2年（1855）

斉彬公は洋式軍艦「昇平丸（しょうへいまる）」を建造し、幕府に献上。

このとき初めて「日の丸」が船尾部に掲揚された。「日の丸」を日本の船幟として掲揚した第一号である。

安政6年（1859）

幕府は幟から旗に代えて「日の丸」を「御国総標」にするという触れ書きを出す。

事実上「日の丸」が「国旗」としての地位を確立したのはこれが最初である。

明治3年（1870）

日の丸が国旗として制定される。

斉彬公が何故に「日の丸」を強く進言したのか、その理由は定かではないが、一説には鹿児島城内から見た桜島から昇る太陽を美しく思い、これを国旗にしようと家臣に言ったといわれている。

しかし、

「斉彬公27歳の時に見た、海上にひときわ鮮やかにはためく

種子島家の「日の丸」の船幟が、強く印象に残っていたのではあるまいか？」

種子島に「日の丸」が生まれたのは、その自然と深い関わりがあるように思われる。

太古から種子島の人々は海の太陽を見続けてきた。

種子島は南北に細長い島であり、東の海の何処からでも、海の彼方から登る太陽を拝み西の浜からは海の向こうに沈む太陽を拝むことができる。

海の向こうに見える、何の妨げのない真っ赤な太陽は「種子島人の心」そのものであり

「日の丸」が種子島家の船幟であるのは、自然のなりゆきであったと考えられる。
現在、種子島には、残念ながら、当時の船幟を証明するものは残っていない。

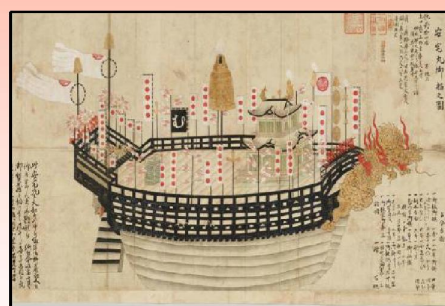
ともあれ、世界の国旗の中でも優れていると言われる「日の丸」だが、
それが「種子島の船幟だった」という一説があることは忘れてなるまい。

参考資料

寛永12年(1635) 徳川幕府が安宅丸(あたけまる 別名:天下丸)を建造し、
船尾に複数の「日の丸」幟を立てている。同時期に建造された天地丸(てんちまる)も、
多数の日の丸の幟(のぼり)で装飾されていた。



江戸幕府船団



安宅丸御船之図

船の船印として、一般には徳川氏の家紋「丸に三つ葉葵」を用いたが、
将軍家の所持船には日の丸を用いることもあった。17世紀初期に描かれたとされる江戸図屏風には日の丸を立てた幕府船団の様子が描かれている。

安宅丸は、あまりにも巨大な船であったため、維持費用が大きく、
天和2年(1682)に幕府によって解体されたが、天地丸は幕末に至るまで、
約200年間に渡って使用された。

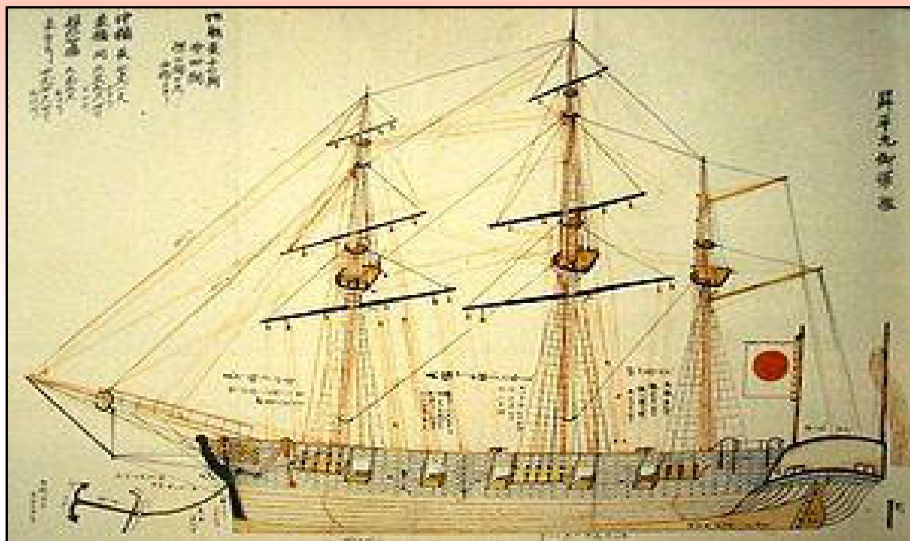
寛文13年(1673) 江戸幕府が一般の廻船と御城米廻船を区別するために「城
米回漕令条」を發布。その中で、御城米廻船の船印として「朱
の丸」の旗を掲揚するように指示し、幕末まで続いた。

天保6年(1836) 12月3日 前の太守公及び世子少将公、磯山に狩す。松寿
院殿、命を奉じ、船よりこれを観る。
船中に日の丸、下着3着(青赤白)吹貫船幟を立て、

公、松寿院に語げて曰く。種子島家の船幟は日の丸なり、故に新たにこれを製せよと。御城代市田美作義宣、家老に命ず。世々相伝えて当家の船旗と為す 種子島家譜記載

安政元年（1854） 日米和親条約調印後、幕府は外国船と区別するための標識が必要となり、日本国共通の船舶幟（日本惣船印）を制定する必要が生じた。その際、島津斉彬公（薩摩藩主）も制定に参画、「日の丸」の採用を強く進言し、「日の丸」が日本国共通の船舶幟となる。

安政2年（1855） 島津斉彬は洋式軍艦「昇平丸」を幕府に献上。このとき初めて「日の丸」が船尾部に掲揚された。「日の丸」を日本国の船幟として掲揚した第一号である。



昇平丸

安政6年（1859） 幕府は幟から旗に代えて「日の丸」を「御国総標」にするという触れ書きを出す。事実上「日の丸」が「国旗」としての地位を確立したのはこれが最初である。

明治3年（1870） 1月27日の太政官の布告により、日の丸が国旗として制定される。

